



みやもとだより

第28号 令和元年8月発行

季節のおまつり

鞍馬寺の竹伐り会式

千二百有余年の歴史を誇る鞍馬寺は牛若丸の修行の地として知られる。叡山電鉄の終点鞍馬駅のほど近くに立つ仁王門をくぐり、青葉繁る参道を三十分ほど上ると鞍馬寺に着く。

竹伐り会式の起源は、九世紀、宇多天皇の御代（寛平年間）にさかのぼることから千年の古儀とも言われる。鞍馬寺の縁起によると、中興の祖、峯延上人が護摩の秘法を行っていると、大蛇が現れ上人を呑み込もうとした。上人が毘沙門天、千手観世音、護法魔王尊が三身一体となった尊天の真言を一心に唱えたところ、大蛇は折り斃された。その後もう一匹の大蛇が現れたが、こちらは雌蛇で、仏法に帰依し本尊にお供えする閻伽という御香水を絶やさず護ることを誓ったので、閻伽井護法善神とし



七度半の御使 稚児が各役に口上を述べる

て本殿東側に祀られるようになったという。

この故事に因んで、毎年六月二十日に五条袈裟を弁慶かぶりにした僧兵姿の若者たちが、山刀で雄蛇に見立てた長さ約五メートルの青竹を豪快に伐り落とす儀式が行われる。

江戸時代の中頃から、東の近江と西の丹波の両座に分かれて、早く伐り落とした方が豊作になるという「勝負伐り」の演目も付け加わった。これは長い竹を一節とびに五段（六等分）に伐るもので、僧兵たちが鋭い山刀を振り下ろす姿を見ていると、まるで弁慶のいた時代に戻ったかのように感じられる。十センチを超える太さの節を、普通の僧兵は三回くらいで伐り落とすが、一振りですぐ落とす剛の者もいて、観衆から大きな歓声と拍手が挙がる。鞍馬のこの祭りには、暴れ狂う自然の力を統御することで、水への感謝を捧げ、五穀豊穡を願う祈りが込められている。

（写真・文 宮本卯之助）



山刀で竹を伐る僧兵姿の若者

太鼓むかしばなし

山城屋

山城屋とは、創業当時の屋号です。初代清助は土浦で太鼓屋を創業。四代目の頃、家の前を流れる川に高瀬舟を仕立て、商売道具や太鼓胴を満載し、職人を伴って船出したようです。四代目とともに浅草に来た職人の中には、子、孫と三世代にわたり宮本でお勤めしたものもありました。土浦で始まった太鼓づくりとその経験は、今に至るまで変わることなく続いています。



山城屋の名残を残す半纏。大紋には、太鼓の太に山印が施されています。

浅草徒然につき

令和元年 三社祭

涼やかな風が吹き抜ける三社祭となりました。改元の節目にあたり、令和元年の三社祭に気が引き締まる、感慨深いとの声も聞こえました。江戸前担ぎの浅草では、つま先を立てて腰でリズムをとりながら神輿を上下にもみまます。神輿につ

けられた房が前後そろって綺麗に揺れる
という担ぎ方と言われ、今年もその姿を
いくつも拝見しました。

最終日の五月十九日(日)には、隅田川の流れる言問橋から程近くにある弊社の前を浅草神社の本社神輿がお渡りになりました。宮本の職人や社員が社屋の前で本社神輿をお迎えするのも恒例です。町会の受け渡しポイントでもあり、担ぎ手の方々と一緒になつて、今か今かと二之宮の到着を待ちわびました。持ち場によっては立ち会うことができませんが、お囃子や神輿が近づいてくると居てもたつてもいられなくなる、そんな人がたくさんいるのは宮本ならではのかもしれません。



弊社の前にて 二之宮

古典芸能へのとびら

定式道具



双盤

歌舞伎では演目や場面の雰囲気に合わせて様々な楽器が使われますが、中でも楽太鼓(平太鼓)、締太鼓、大拍子、桶胴太鼓、ゴン(銅鑼)、双盤などの一式を弊社では定式道具と呼んでおります。定式とは「決まったやり方」という意味で、一定して揃えている楽器(道具とも呼ぶ)を総称しています。双盤のように、寺院の仏具として使われるものも歌舞伎を支える楽器の一つです。

近年は海外に渡る機会も増え、昨年はハワイやロシアでの歌舞伎公演でお使いいただきました。国内にとどまらず海外での公演や各種イベントが続く際は、たくさんある太鼓を総動員する
ときもございます。

弊社発行の「みやもとだより」は、この度より多くの方々にご覧いただけるよう従来の印刷物からホームページにてご紹介する運びとなりました。従来の「季節のおまつり」はじめさらに充実した紙面作りを目指してまいりますので、皆さまには何卒ご理解の上引き続きご覧賜われれば幸いです。ごさいます。

今回は梅雨時に京都鞍馬寺で行われる竹にまつわる儀式を取り上げました。竹は草でもなく、木でもない神秘的で強い生命力を持ち地上である程度まで成長した後は土の中で新しい生命を生みだしてゆきます。自身に節を持ちしなやかに風雪に耐える忍耐力、筍など食材や神聖な祭事具にもなる竹は、弊社の篠笛やかつぎ桶胴太鼓の「たが」としても欠かせないものです。弊社では竹のように柔軟な心を持ち、かつしっかりと気を引き締めた仕事をしてゆく所存です。

宮本卯之助

発行	株式会社 宮本卯之助商店
	企画広報室
	〒111-0035
	東京都台東区西浅草2-1-1
	電話 03-38404124
	www.miyamoto-unosuke.co.jp